ライフケアガーデン熱川　本館

症　例　概　要　入居者：90代　女性　要支援1

病名：第1腰椎圧迫骨折(2019年6月中旬)、

膀胱癌、陳旧性心筋梗塞、とびひ(全身的、特に右上肢)

経過：W県にて出生。成人後は小中学校の教師をされ、結婚後も続けられる。退職後は編み物や書道の講師をされ、社交的で手先が器用であった。また、ワインの卸しで起業した長男や看護の教員などをされた次女を助けるため、頻繁に上京もしていた。　2018年に夫を亡くされ独居となり、多忙をきわめていた長男が2019年1月に急死しかなりのショックを受けられていた。

2019年6月に自宅にて転倒し腰椎圧迫骨折を受傷され、W県の病院に入院する。その後次女が当時勤務していた熱川温泉病院に転院された。リハビリが進み回復期期限を迎えるにあたり、今後の利便性等を考えた結果、当施設への入居が決まった。

内　　容

入居時、すでに90代でありながら単独での歩行移動が可能でした。他のご入居者とのコミュニケーションも良好であり、編み物で帽子を作成するなど手先も器用であり、また容姿も10歳以上若く見られることもしばしばあるご入居者でした。しかし、鬱の既往や原因不明の皮膚の荒れをいつまでも気にされる等、精神的に繊細な面も見られていました。

2022年1月に肺炎にて1ヶ月半ほど入院となり、その間に身体・精神機能の低下。11月には精神機能の更なる悪化が見られ、物盗られ妄想や所持品を投げつけるなどのBPSD(行動心理症状)が強く現れるようになり、幻覚・幻聴・意味不明な発言など、認知症の症状が日に日に強くなっていきました。身体的にも、歩行器を使用することにこだわっていましたが車いす移動が定着し、ADLは3カ月程で要介護3相当まで低下しました。

そこで入居相談員はキーパーソンに相談のうえ年末年始をご家族のもとで過ごして頂くこと、

多床室から個室に部屋移動することを実施しました。

結果、物盗られ妄想は治まったものの幻覚や幻聴の訴えは続いている状態でした。

更なる対策として、新しい居室は事務所の近くであることから、事務職員や施設管理職員による積極的

な声掛け、不穏を訴えた際には素早い情報共有をするよう依頼し実施しました。不穏の報告を受けた生活相談員は素早く訪室して傾聴を行い、庭園散歩やレク参加を促しました。

また、看護職員には塗り薬をいろいろ試してもらうことで皮膚の荒れにも改善が見られるようになりました。

部署を超えて親身な対応を続けた結果、ご入居者に少しずつ笑顔と活気が戻ってきました。マッサージが中心となっていたリハビリでは歩行器を使用することを提案したところ、挑戦してみることになりました。心配していた腰の痛みも軽度で、歩き出すと自信がよみがえってきたのか目標よりも長い距離を歩かれ、さらに「お疲れ様」とリハビリを終了しようとしたところ、「もう一度、歩いてみようかな」との発言があり、周りを驚かせつつ更に長い距離を歩行し喜びに満ちた雰囲気となりました。

不穏症状の悪化で急激に身体機能の低下したご入居者が、職員の部署の垣根を超えた職員のかかわりより、入居者本来の笑顔がよみがえり、身体機能と意欲の改善がみられる事例です。